

研究成果の紹介

大粒で収量が多い省力栽培が可能なイチゴ新品種「恋みのり」

【開発の社会的背景と育成の経緯】

近年のイチゴ栽培においては、1 ha 規模の高収益経営を目指した次世代型の生産システムの構築が進められています。イチゴ栽培は10 a 当たりの労働時間が年間2000時間程度と果菜類の中でも特に多く、その6割程度を収穫・調製作業が占めており、このことが規模拡大の大きな支障となっています。そこで、大粒で収量が多く、収穫・調製作業を大幅に省力化できる品種を目指して、2008年に「さがほのか」等の多元交配から得た大粒で収量が多い早生系統03042-08を種子親に、食味に優れた「熊研い548」を花粉親として交配を行い、2016年9月26日に「恋みのり」として、品種登録出願しました。

【大粒で、輸送に伴う傷みが少ない果実】

果実は大粒で、鮮やかな淡赤色～赤色をした短円錐型の果形です。果実硬度は適度に高く、輸送に伴う傷みが少なく日持ち性がよいことから、輸送性にも優れます。香りが強く、糖度および酸度は比較的安定しており、食味は良好です。

【促成栽培に適した栽培しやすく、収量が多い品種】

促成栽培に適し、草勢が強く、冬でも生育が旺盛で、栽培が容易です。11月下旬から収穫可能で、連続出蓄性に優れ、特に単価が高い3月末までの収量が多くなることから高い収益性が期待できます。

【中・大規模イチゴ栽培に適した省力型品種】

花数が多過ぎず、また果房の伸びがよく果実が見つけやすいため、収穫作業の省力化が可能です。さらに、収益性の高い2 L以上の大玉率が高く形状の揃いが良いため、調製作業が大幅に軽減できます。

「恋みのり」は栽培管理が容易、収量が多い、収穫・調製作業の省力化が可能という特長を持つことから、パッケージセンターが整備された中・大規模栽培に適する品種として、熊本地震で大きな被害を受けた阿蘇、宇城地域を中心に2017年度は約10haが作付けされ、普及が進んでいます。なお、種苗は民間種苗会社を通じて販売されています。

【園芸研究領域 曾根一純】

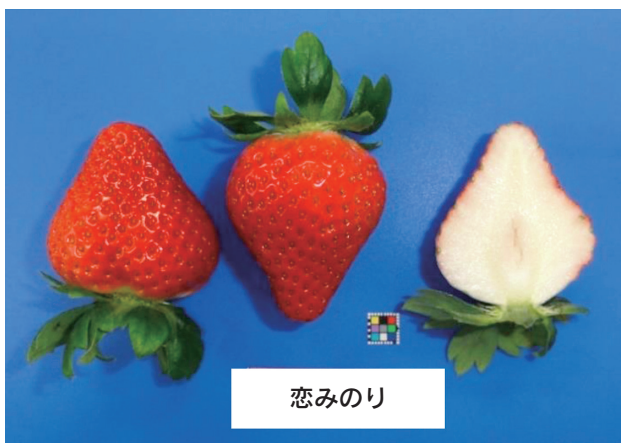


写真 果実（左）；画像補正用カラーチャートラベルは1辺1 cm、草姿（右）；白ゲージは30cm。

「恋みのり」の果実、着果状況